瀬戸内海研究フォーラム in 奈良

瀬戸内海における地域資源の再評価と再編

－豊かな里海創成期の転機に立つ瀬戸内海－

【 趣旨 】

瀬戸内海は、瀬戸内海環境保全特別措置法制定40周年、瀬戸内海国立公園指定80周年を経て、今、歴史的に大きな転機に立っている。環境保全においては地域特性を重視した新たな段階に進む局面にあり、風景等の地域資源においても新たな掘り起こしがはじまっている。瀬戸内海は瀕死の海を脱したものの、生物多様性と生物生産性の豊かさの回復が課題であり、瀬戸内海全体の管理から地域性・季節性に合ったきめ細かい管理へと再編されようとしている。風景の見方も内海多島海景観の俯瞰から、島嶼内部の生業景観の巡り歩きへと変化し、文化的景観、産業景観等の評価とともに、風景が再編されようとしている。

瀬戸内海は世界からも注目されつづける不思議な場所である。19世紀に欧米人にいち早く絶賛されて以来、21世紀の現在、海と人の共生するSATOUMIとして世界から評価されはじめ、直島のアートや瀬戸内国際芸術祭が世界から注目されている。瀬戸内海の再評価と再編がおきている。

本フォーラムは、奈良特有の地域資源の生成を環境と文化の関係から紹介しつつ、海域、風景等の地域資源の再評価と再編の観点から、豊かな里海創成期の転機に立つ瀬戸内海を浮きぼりにしたい。

【 日程・場所 】

平成２７年９月３日～４日　　奈良県文化会館（奈良県奈良市）

【 主催・共催等 】

主　催：特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議
共　催：瀬戸内海環境保全知事・市長会議
協　賛：（公社）瀬戸内海環境保全協会
後　援：環境省、奈良県、奈良市、奈良県立大学、関西学院大学

【 瀬戸内海研究フォーラム in 奈良　運営委員会 】

委員長：西田　正憲（奈良県立大学地域創造学部教授・（特非）瀬戸内海研究会議理事）
委　員：佐山　浩　（関西学院大学総合政策学部教授）
藤井　智康（奈良教育大学教育学部准教授）
井原　縁　（奈良県立大学地域創造学部准教授）
柳原　章二（奈良県くらし創造部景観・環境局環境政策課課長）
油谷　彰浩（奈良市環境部環境政策課課長）

９月３日（木）１３：００～１８：４０

開会　　１３：００～１３：２５

１．あいさつ　　特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議　理事長　　柳　哲雄

瀬戸内海環境保全特別措置法について、２年程前より議員連盟によって、現状に応じた、豊かな里海としての瀬戸内海を根本とした新たな瀬戸内海環境保全特別措置法へ変更しようという動きがあり、8 月 28 日に参議院でこの提案が可決されました。現在は衆議院へ提出されているところです。また、別で瀬戸内海環境保全基本計画の変更が今年 2 月に閣議決定され、翌年 4 月から全く新しい瀬戸内海の施策が始まろうとしています。本フォーラムのサブタイトルのとおり、瀬戸内海は豊かな里海創成期の転機に立っています。この２日間の議論を通じて、今後の豊かな瀬戸内海に向けて、誰がどこでどのような行動をとる必要があるのか、ご参加の漁民、行政、住民、NPO、研究所の方々とともに新しい方向を見つけ、考えていきたいと思います。

２．あいさつ　　瀬戸内海環境保全知事・市長会議　代表幹事　　梅谷　順子

瀬戸内海の環境保全のために、昭和４６年に最初は沿岸の１１府県３市の協力を得て、瀬戸内海環境保全知事・市長会議（以下、知事・市長会議）を発足しました。以来、参加の府県市も増え、また官民一体の努力により、瀕死の海といわれた瀬戸内海は大幅な改善が図られてきました。一方、豊かな海として色々な課題が出てきました。知事・市長会議としては、瀬戸内法の改正について働きかけてきました。この４月からは自民党だけでなく、党派を超えた議員連盟を発足しました。先の柳先生からお話しがありましたとおり、改正法案につきまして、8 月 24 日に参議院で提案が可決、現在は衆議院で審議中です。改正法案では、栄養塩類の適切な管理、藻場・干潟の復活、水産資源の持続的確保なども力を入れて、豊かな海への展開を図っていくこととしています。

本フォーラムでは、瀬戸内海の環境の改善以外にも、奈良特有の環境と文化といった切り口で色々なプログラムが用意されています。この２日間の内容が有意義なものとなりますよう期待しています。

３．祝　　辞　　環境省近畿地方環境事務所長　　秀田　智彦

岡山県の環境省の事務所に赴任していたことがあり、その当時、瀬戸内海国立公園の管理に携わっていました。瀬戸内海国立公園では、伝統的な集落景観や海の幸をいかした伝統料理あるいはお祭り、島特有のゆったりと流れる時間、また海に出ますと内海の穏やかなイメージとは裏腹の激しい潮流または大きい潮の干満などダイナミックな自然とそれをうまく利用した人々の営みに感動するとともに瀬戸内海の豊かさと奥深さを実感しました。太古の昔から人々を育んできた豊かな瀬戸内海ですが、高度経済成長期には瀕死の海と呼ばれるまでに水質汚濁が進んでいました。様々な努力により現在の水質は良好となりましたが、

かつての豊かな海を取り戻すための課題は多く残っています。環境省では、今年２月に瀬戸内海環境保全基本計画を改訂し、瀬戸内海がもつ多面的な価値や機能が最大限に発揮された豊かな瀬戸内海を目指すこととしています。また先程よりお話しにありましたが、そのような理念を明確にうたった瀬戸内海環境保全特別措置法の改正案が、国会に提出されたところです。かつてのような豊かな海を取り戻すために、本フォーラムにご参会の皆様をはじめとする関係者の皆様とともに科学的知見に基づいた有効な取り組みを進めていきたいと考えています。引き続き、ご支援ご協力をお願いいたします。

４．祝　　辞　　奈良県くらし創造部長兼景観・環境局長　　中　幸司

奈良県は、瀬戸内海に直接面する県ではありませんが、瀬戸内海に流れ込む大和川を通じ、瀬戸内海に少なからず影響を与える県です。昭和４０年代の大和川は、ＢＯＤの平均値２０mg/L を超えており、常に河川ワーストランキング上位に位置づけされていました。しかし、その後の下水道の普及、合併浄化槽の整備あるいは事業場への廃水対策指導等により、年々水質は改善され、現在ではＢＯＤの平均値３mg/L を下回っています。過日、新聞で大和川に数万匹の天然アユが遡上するまでになったと報道されていました。

奈良県では、「きれいに暮らす奈良県スタイル」プロジェクトを実施し、その中のプロジェクトの１つとして「大和川のきれい化」をテーマに取り組んでいます。汚水処理人口普及率の向上あるいはきれいな水辺空間づくりを通して、大和川を一層きれいにし、ひいては「瀬戸内海のきれい化」につなげていきたいと考えています。

５．趣旨説明　　瀬戸内海研究フォーラム in 奈良　運営委員長　　西田　正憲

奈良での瀬戸内海研究フォーラム開催は１０年ぶりです。前回同様、瀬戸内海の環境保全を踏まえつつ、奈良独特の文化や風景等の内容を盛り込み検討、企画を行いました。昨年が瀬戸内海環境保全特別措置法制定４０周年、瀬戸内海国立公園指定８０周年、そして今年が瀬戸内海環境保全基本計画の変更、さらに間もなく瀬戸内法の改正がなされるであろうということから、瀬戸内海の環境保全について、今がまさに大きな転換点と言えます。従来の全域総量規制でなく、湾灘ごと、地域性あるいは季節性を重視した水質管理への大転換です。近年の様々な手法で瀬戸内海に取り組んできていましたが、江戸時代の湾・灘の概念に回帰、いわゆる海域の再編、再評価です。同様に風景においても、再評価と再編が行われています。典型的なものとして、備讃瀬戸の直島のアートがあります。従来は展望地から多島海を楽しむことが一般的でしたが、現在は巡り歩いて地域の生活系あるいは生業系を観る、遠景から近景、肌で感じ、体感する、そういったものに変化してきています。備讃瀬戸に限らず、芸予諸島では本格的なサイクリストがどんどん走っており、サイクリストの聖地となっています。地域密着型の地域資源の掘り起こしが進んでいると思います。さらに東のオリーブ園に対し、芸予諸島ではレモン園が非常に爽やかな風景を見せています。このように地域資源がどんどん価値を発揮し、見直され、掘り起こされ、再評価され、再編されていくことが重要だと思います。

わが国は現在、未曾有の問題に直面しています。人口減少社会、消滅市町村といった言葉も飛び出しています。瀬戸内海も島々がものすごく疲弊しています。日本全国の構造的な問題で、対処は難しいですが、瀬戸内海研究会議として座視して良い訳ではありません。そこで、ヒントとなるのが備讃瀬戸や芸予諸島における地域資源の掘り起こしや再編、再評価の動きをきちんととらえることだと思います。この２日間、環境問題がメインとなりますが、環境と文化、さらに瀬戸内海地域の問題、そういった様々な問題に言及でき、皆様とともに考えていければ、と思います。

第１セッション　　１３：３０～１５：３０

テーマ：掘り起こされる瀬戸内海の多様な地域資源
座　長：佐山　浩（関西学院大学総合政策学部　教授）

第１セッションは、瀬戸内海固有の地域資源の掘り起こしと再評価、地域資源の再編による豊かな里海実現に寄与することを趣旨として、ご発表いただきました。

☆世界につながる瀬戸内海の宝『衆鱗図』
講師：滝川　祐子（香川大学農学部　技術補佐員）

衆鱗図は、江戸時代に香川県高松を治めていた高松藩松平家第５代藩主、松平頼恭が制作を命じた今から 250 年程前の魚類を中心とした博物図譜です。衆鱗図は学術的価値として、①東西博物学への影響、②生物学的視点の大きく２点があり、また写実的で精緻な描写は美術的・技巧的にも高く評価されてきました。衆鱗図に描かれた魚類・甲殻類を東西交流史と生物学の観点から調査研究を実施し、江戸時代に大流行した博物学は、今まで西洋の生物学の進展とは全く関係のないもの、いわば趣味的なものと考えられていました。しかし実際は、その進化はきちんと評価され、世界の近代生物学に貢献され、さらには科学的価値があることが分かりました。衆鱗図をはじめとする日本人の研究者や先人の業績の再評価につながると考えています。

☆奈良の「山辺の道」の発見と風景の再編
講師：山口　敬太（京都大学大学院工学研究科　助教）

地域資源の発掘、それをどのようにして地域づくりに活かすか。その歴史的事例の１つとして、「山辺の道」があります。山辺の道は、奈良盆地の東側を走る道で、日本最古の道の１つと言われ、道沿いには著名な神社や天皇陵、古墳、集落等々が点在し、また現在では年間２０万人が訪れる有名なハイキングコースおよび観光地となっています。しかし、山辺の道については、戦前の資料はほとんど見られず、戦後に再発見され、再評価と再編が行われ、現在のエリアイメージを形成していくに至りました。また再評価と再編には多様な主体が参画し、古代への追憶・懐古を想起させる地域イメージの核となりました。

☆瀬戸内海の近代国防遺産
講師：唐澤　靖彦（立命館大学文学部　教授）

明治 13(1880)年からの東京湾要塞を皮切りに築かれ、瀬戸内海沿岸の陸軍の要塞施設は、明治 20～30 年代に築かれました。近代要塞は様々な施設によって構成される複合体です。毀損や崩落、崩壊で見られない要塞はあるものの、和歌山側の由良要塞等は良好な状態で残存しています。また現在は、特に友ヶ島の雰囲気が評判になり、訪れる観光客が増加しています。さらに、近代国防遺産の価値は、建築物の外観上の素晴らしさだけでなく、人間が長期駐屯できるよう緻密に設計されている点に

もあります。アムステルダム防塞線や台湾の要塞施設に倣い、今後、日本の要塞施設についても史跡としてきちんと整備し、活用していくことが可能ではないか、と考えています。

☆奈良県の景観資産登録制度
講師：梶岡　優光（奈良県くらし創造部景観・環境局景観・自然環境課長補佐）

平成 16 年に景観そのものの整備、保全を目的とした総合的な法律として、景観法が公布されました。それに伴い、平成 21 年に奈良県では景観条例及び景観計画を策定しました。景観資産登録制度は、景観条例の第 20 条に記載されており、平成 23 年から運用を開始しました。景観資産の価値の共有を行い、地域の景観資産情報の広報を行うことで、①景観づくり、地域づくりへの県民意識の向上、②観光資源として活用し、観光客を誘致すること、を目的としています。現在までに計 109 ヶ所を景観資産として登録を行いました。県民への普及及び啓発、景観資産への誘致、視点場の維持及び管理、景観資産登録数の増加等を今後の課題としまして、より効果的な運用を検討していきたいと考えています。

第２セッション（ポスターの概要発表）　　１５：４５～１８：００

テーマ：環境保全・創造に関する研究・活動報告
座　長：藤井　智康（奈良教育大学教育学部　准教授）
発表者：２５名（発表時間　各５分）

No	発表題目	発表者	所　属
1	大阪湾の底質に関する現地調査および早期続成作用モデルによるモデル解析	廣瀬　文明	大阪大学大学院工学研究科 地球総合工学専攻
2	香川県内で発生した海ごみの漂流予測シュミレーション	田所　史法	香川県環境森林部環境管理課
3	武庫川流域及び大阪湾海域における夏季及び冬季の有機物生分解特性に関する研究	松林　雅之	（公財）ひょうご環境創造協会 兵庫県環境研究センター
4	大阪湾、播磨灘海水及び流入河川水における有機物濃度の変動	古賀　佑太郎	（公財）ひょうご環境創造協会 兵庫県環境研究センター
5	^{222}Rnを用いた大阪湾における地下水湧出現象の実態把握	大城　光	大阪大学大学院工学研究科
6	瀬戸内海島嶼部における地下水湧出とアマモ場との関係について	齋藤　光代	岡山大学大学院環境生命科学研究科
7	一級河川における上流から下流までの栄養塩分布に及ぼす河川-地下水交流の影響-岡山県旭川の例-	安田　香穂	広島大学大学院総合科学研究科

No	発表題目	発表者	所　属
8	淀川感潮域における有毒赤潮に関する研究	中村 一平	神戸大学大学院海事科学研究科
9	瀬戸内海における有害赤潮の発生と栄養塩および微量金属の分布	谷口 典	県立広島大学生命環境学部環境科学科
10	大阪湾岸における下水道由来栄養塩負荷の影響評価	小野寺 真一	広島大学大学院総合科学研究科
11	流域からの窒素輸送に及ぼす農業用堰の影響	清水 裕太	(国)農研機構近中四農研センター(学振PD)
12	九州別府湾流域における窒素負荷量の長期変化について-窒素負荷モデル解析による-	白 佳弁	広島大学大学院総合科学研究科
13	南海トラフ巨大地震津波による大阪湾における底質巻き上げシュミレーション	鈴木 綜人	神戸大学大学院海事科学研究科
14	南海トラフ地震による巨大津波が引き起こす大阪湾における塩水化	中田 聡史	神戸大学大学院海事科学研究科 津波マリンハザード研究講座
15	瀬戸内海の「海洋保護区」の今日的意味	清野 聡子	九州大学大学院工学研究委環境社会部門
16	人工海浜における希少種保全のための取り組み	渡辺 雅子	ニタコンサルタント株式会社 ・沖洲海浜楽しむ会
17	尼崎運河水質浄化施設での市民協働活動と生態系サービス評価について	山中 亮一	徳島大学大学院 ソシオテクノサイエンス研究部
18	尼海での栄養塩ジュンカンの取り組み	西上 広貴	徳島大学工学部建設工学科
19	容器包装廃棄物削減に寄与するびんリユース推進を通した循環型社会形成に向けて	中島 光	NPO団体「World Seed」
20	公衛協発・ひろしま美化大作戦～住民団体が展開する環境美化活動～	馬場田 真一	（一財）広島県環境保健協会 地域活動支援センター地域支援課
21	香川大学小豆島SAKATEプロジェクト～2014年度の取り組み～	井餘田 美知	香川大学経済学部・法学部
22	香川大学直島地域活性化プロジェクト～2014年度の取り組み～	三宅 あずさ	香川大学経済学部・法学部
23	負の歴史的遺産における生活実践の伝承可能性 -ハンセン病療養所におけるアートプロジェクトを事例として-	宮本 結佳	滋賀大学教育学部
24	姫路市家島の暮らしと若者の将来設計	柏尾 珠紀	滋賀大学環境総合研究センター
25	「ふるさとの海辺づくり」を目指した学童児童との取り組み	前田 真里	NPO 人と自然とまちづくりと

９月４日（金）　９：３０～１５：３０

第３セッション　９：３０～１１：３０

テーマ：大和川の環境と文化－多様な文化を生み出してきた水系
座　長：井原　縁（奈良県立大学地域創造学部　准教授）

第３セッションは、奈良盆地の集落遺跡、歴史的庭園、歴史的な街並み等の文化財からその土地の自然に根差して生きてきた先人たちの営みの痕跡を読み解き、文化財の水との関わりに焦点をあて、人と川（特に大和川）の豊かな関係性をテーマにご発表いただきました。

☆大和川と「史跡」－唐古・鍵遺跡と大和川・寺川－
講師：藤田　三郎（田原本町教育委員会文化財保存課長）

奈良県の北西に奈良盆地があり、奈良盆地の中には600近くの遺跡が存在します。また、奈良盆地の中央に位置する場所に、国遺跡である唐古・鍵遺跡があります。弥生時代は、水稲稲作農耕が主流であり、そのため水との関係上、奈良盆地のような低地部に遺跡が築かれるようになりました。河川が利用されるとともに水系に基づいて環濠集落を形成し、居住空間が築かれていきました。しかしながら奈良は洪水が多く、それらに対する恐怖から守るために多条に環濠を形成し、上流からの洪水を迂回させ、また集落内部の排水を機能させる等、水系に応じて地形を改変することで、長期的に安定して集落を維持することが可能となりました。

☆大和川と「名勝」－依水園・奈良公園と吉城川－
講師：尼﨑　博正
（京都造形芸術大学環境デザイン学科　教授/日本庭園・歴史遺産研究センター　所長）

庭園の優れた風致景観は連綿と続く人々の営みによって形づくられ、常に人との関わりの中で生き続けています。それらの形成過程が重要で、その形成過程に本質的な価値があり大きな特徴があることを再認識しておきたいと思います。奈良は、降水量が少なく山地が低いため安定した水供給が難しく水を利用した庭園づくりには不向きな風土であったと思います。しかしながら依水園をはじめとするいくつかの名勝は、河川が立地環境と歴史・文化を紡ぐ重要な役割を果たしており、それはまさに生きている記念物であり、文化的景観そのものだと考えています。

☆奈良盆地の歴史的都市・集落と水環境
講師：増井　正哉（京都大学大学院人間・環境学研究科　教授）

現代において水環境との関わりは、弥生時代から、特に近世から激変しています。歴史的町並みの保存や活用を考えていく上で水との関わりを知ることは重要であると考えています。
しかしながら、水との関わりをテーマにした街並み保存や活用が奈良にはほとんど例がなく、それは奈良の立地関係

や地形によるものであるのだと思います。かつて消失した水路等を地図上で重ね合わせることで都市空間を丁寧に読み解き、現代ある角地や道の意味について発見していくことが必要だと思います。

第４セッション　　１３：００～１５：００

テーマ：豊かな里海創成期の転機に立つ瀬戸内海
座　長：西田　正憲（奈良県立大学地域創造学部　教授）

瀬戸内海環境保全基本計画が平成 27 年 2 月に改訂されたことは、これからの瀬戸内海の海域管理、環境保全の大きな転換点になると考えています。折しも根拠法となる瀬戸内海環境保全特別措置法の改正案もまもなく国会で審議されようとしています。豊かな里海創成期の転機に立つ瀬戸内海というテーマで議論していただき、今後の瀬戸内海の在り方等について考えていきたいと思います。

☆瀬戸内海における環境政策
講師：根木　桂三（環境省水・大気環境局水環境課閉鎖性海域対策室長）

瀬戸内海環境保全基本計画の変更が平成 27 年 2 月に閣議決定されました。変更後は、湾・灘ごとや季節ごとの課題に対応し、多面的な価値・機能が最大限に発揮された『豊かな瀬戸内海』を目指した内容となり、計画の進捗管理についての規定が追加されました。そして現在、瀬戸内海環境保全特別措置法の改正について、国会で審議されているところです。また環境省では、きめ細やかな対策及び取り組み等を推進していく上で、環境省実施のモニタリング調査データの整理及び把握、第 8 次水質総量削減の在り方検討、水環境保全及び地域活性化の観点で重要な里海づくりについてのアンケート調査、環境技術実証事業等に取り組んでいます。

☆瀬戸内海の環境の現状と課題
講師：松田　治（広島大学名誉教授）

日本の高度経済成長期以前には、円滑な物質循環及び豊かな生態系があったと考えられています。しかし高度経済成長期を経て、環境悪化が著しくなったことを受けて、瀬戸内法制定及び総量削減の取組が実施された。平成 27 年 2 月、約 15 年ぶりに瀬戸内海環境保全基本計画が、従来の水質保全を中心とした内容から沿岸域の環境保全及び再生、水産資源の持続的利用を含んだ内容へ大幅に改正されました。瀬戸内海は戦後から 60 年ぐらいの年月をかけ変化しており、短期間で従来の瀬戸内海の状態まで回復することは不可能です。そのため、次世代の人材養成もふくめて 100 年ぐらいの長期的な計画及び持続的な取組を実施することが必要だと思います。

☆失われゆく瀬戸内海の生活文化
講師：印南　敏秀（愛知大学地域政策学部　教授）

自然との関わり方、事実・意識が現在、急速に消失しつつあります。そこで、従来を知る重要な手掛かりのひとつとして宮本常一の写真があります。海・山・里の景観を総合的に観察し、かつ生態学及び民俗技術を重視されており、瀬戸内海が抱える様々な問題、生活技術を考えていく上で、

重要な資料になると考えています。戦前戦後にかけて日本中を歩き、その目で瀬戸内海を見ているため、様々な発見があったと思います。その土地ごとで見て、感じたものを地域資源として集積しつつ、また現代的課題に組み替えて再評価・再編に活かしていく必要があると思います。

☆「里海」の明日を考える
講師：岩崎　誠（中国新聞社　論説副主幹）

平成27年2月に瀬戸内海環境保全基本計画が改定され、その中で海砂利採取の原則的禁止が明記されました。漁業者や住民、メディア等の多くの人々が禁止に至るまでの流れをつくったと自負しています。また近年、里海ということばが定着し喜ばしい一方で、里海づくりについて、湾灘ごとにきめ細やかな体制をつくり、地域レベルで創意工夫を見出すことは難しく、現状では地元任せに近いのが現状です。さらに里海づくりを初めとする新しい試みに対応できる熱意やエネルギーを今後どのように確保していくのか。水質及び生態系については、少子高齢化や集落・漁港の衰退等も加えた広い視野で対策を講じていく必要があると考えています。

総括・ポスター賞表彰式・閉会　　１５：１０～１５：３０

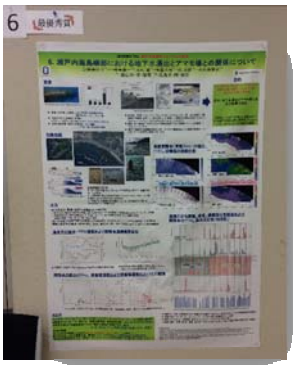
１．総　括　　瀬戸内海研究フォーラム in 奈良　運営委員長　　西田　正憲

今回のフォーラムは「瀬戸内海における地域資源の再評価と再編－豊かな里海創成期の転機に立つ瀬戸内海－」というタイトルで開催させていただきました。現在、大きな転換期を迎えていること、これは非常に重要なテーマでした。総じて瀬戸内海で今、何が問題となっているのか、きれいにはなったけれど豊かではない現状について認識し、今後の瀬戸内海の管理及び豊かな里海の実現に向けて我々関係者の連携、教育、参画が重要だと思います。

２．表彰式　　特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議　理事長　　柳　哲雄

事務局による得票集計をもとに、運営委員長が最終決定した次の発表者に、柳理事長より表彰状及び副賞の授与がなされました。

最優秀賞
No. 6
「瀬戸内海島嶼部における地下水湧出とアマモ場との関係について」
　齋藤　光代　　岡山大学大学院環境生命科学研究科



地下水湧出とアマモ場との関係について検討することを目的として瀬戸内海島嶼部沿岸の潮間帯を対象に地下水湧出とアマモ群落の空間分布に関する調査を実施し、これらの関係について考察した内容について報告してい

ただきました。

優秀賞

No.２５

「「ふるさとの海辺づくり」を目指した学童児童との取り組み」

前田　真里　　NPO 人と自然とまちづくりと

栄養塩のジュンカン改善対策として、地元の子供たちと一緒に、郷土愛を育みながら実施されているふるさとの海辺づくりについて報告していただきました。

No.２１

「香川大学小豆島 SAKATE プロジェクト～2014 年度の取り組み～」

井餘田　美知　　香川大学経済学部

2005 年 10 月から直島において、香川大学生が主体となり、地域活性化の一躍を担うことを目的とした様々な活動の取り組みについて報告していただきました。

３. 閉会あいさつ　　特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議　副理事長　　多田　邦尚

今回のフォーラムは、奈良県で開催したことで随所に奈良独特の文化や風景等の内容が盛り込まれていました。同時に、専門的な学会では会えないような人たちと普段では聞けないような話、できないような議論ができ、分野横断型の学際的集団である瀬戸内海研究会議らしいフォーラムでした。最後に、フォーラムの運営にご尽力いただいた関係各位に感謝申し上げます。来年は 9 月 8、9 日に、愛媛県松山市で愛媛大学の武岡先生を中心とした「瀬戸内海研究フォーラム in 愛媛」を開催することとなっております。来年皆様とお会いできることを楽しみにしております。